月の欠片の独り言

雨和七瀬

大樹の洞の中で本を読んでいると、一羽の小鳥が飛んできた。

「そんなとこでじっと本を見てると、遠くが見えなくなっちゃうよ」

随分とうるさい奴だ。僕は手で追い払おうとした。小鳥は一度ひらりと飛んで僕の手を躱すと、伸ばした僕の手を脚で掴んで止まり木の代わりにしてきた。

「ほら、今日は月がとびっきりに綺麗よ。出ておいで」

そのまま僕の手を引こうというのか、脚の爪を食いこませながら引っ張られた。あまりの痛さに僕は手を振り、引っ込めた。

「行かない、邪魔しないで」

でも僕がもう一度本の方に目をやると、外の月明かりに慣れてしまった目では洞の中で本を読むことは叶わなくなってしまった。

「……もう」

仕方なく僕は本に栞を挟んで閉じ適当に置く。寝返るように体をねじって足を外に出し、体を起こして洞の淵に腰かけた。

この森の中で一番大きい木の上の方だからか、今日は雲一つない夜空だからか、他の木々の茂りが雲海のように地と空を区切り、空から見下ろす満月からの視線を遮るものは何も無かった。

「ね、まん丸で綺麗でしょ」

小鳥は僕の肩に降り、その羽毛を擦り寄せてきた。小鳥の言う通り、少しの欠けも無いそれは、星の飾りすら要らないと言わんばかりに輝きを放っていた。

「……そうだね」

僕は月から目を逸らした。でも、その光は目に映る全ての輪郭を作り、色を与える。僕自身も例外ではない。

「……そういえば、人里で噂話を聞いたの」
さすがの小鳥も話題を変えてきた。だからといって機嫌を直すことは無いけど、耳を傾けることにした。
「人里ねぇ……」
「あ、遠出したんじゃなくて、すぐ近くの、獣人の子たちが住んでる村よ。この森に人間が住んでいるんですって！　ずっとどこかに向かって独り言を喋っているらしいのよ」
小鳥はピチチ、と笑いながら話す。こいつわざとやってるんじゃないかってくらい、僕の神経を逆なでする。
「へー、そーなんだー」
なるべく感情を表に出さないように声を出すと、小鳥は羽を膨らませた。その身体はふっくらと広がり、羽の先がツン、と僕のあごやら頬やらに当たった。
「ちょっと、アタシを信じなくていいの？　精霊の森から人間を追い払うのがお仕事なんでしょ！」
少し違うけど、言ったところで理解できるわけじゃない。僕は出かかった言葉を飲み込んで、目を細めて口角を吊り上げた。
「どうせ僕のことが見えちゃっただけだよ。ほら、僕は変化が苦手じゃん？」
僕は小鳥に手を動かしながら見せると、小鳥は「それもそうね」と納得した。
「でもそうしたら、今度獣人たちが来たらどうするの？」
小鳥は首を傾げる。答えは決まっている。
「暇だし、久々に『遊んで』もらおうかな」
鬱屈とした気持ちも、全部そいつらに吹き飛ばしてもらおう。
「あんまりいじわるしちゃだめよ？　また森を焼かれると困っちゃうわ。この前は王様のおかげで元通りになったけど、あなたは同じことができないでしょ？」
……本当に、こいつは。
気が付けば僕は小鳥を握りつぶしていた。しかしそれに意味がないことも分かっている。

「怒らせちゃった、ごめんなさい」
手の中じゃない、木の外から声が聞こえる。
「でもその体、気に入ってるから返してくれないかしら？」
僕はゆっくりと手を緩める。器のようにした手のひらの上、骨が折れ、脚も変な方向に曲がってしまった小鳥。それを月の光にかざすと、微かにパキパキ、と骨が繋がり、関節が嵌まっていく音が聞こえる。羽に、僕の手に付いた血も傷口に吸い取られるように戻っていく。
しばらくそのまま待っていると、小鳥は目を開けた。
「もう、びっくりした。たまにやるその癇癪、大人になるまでに治さないと立派な王様になれないよ」
……しょうがない。こいつは本当に何も分かっていないんだ。もう一度握りつぶして池に投げ捨ててやりたいのをぐっとこらえた。握った手のひらに、まだ生暖かさだけ残っている。
「はいはい、大人になるまでにねー」

相手してるのが嫌になってきて、僕は木の洞の奥で寝ていた絨毯を叩いてから、木の洞から飛び降りた。するとすぐに絨毯が僕に追いついて僕を受け止めた。そして大樹の根元にある池の上まで行き、ようやく一人の……いや、一人でいられる時間を取り戻した。
「はぁ、最悪……」
僕は澄み切った水面を眺める。僕の顔を映すや否や、池の中にいる魚たちはパシャパシャと僕の虚像を揺らした。
「……」
「いつ、大人になるんだか」
森を追いやられて、大陸を出て旅をして、戻ってきて。それでも僕は同じ姿のままだ。もしかしたら世界のどこかで僕の代わりに大人になった奴とか居るんだろうか。
そんなことを考えていると、水面は再び静かになった。でも、僕の顔を映さないことにしたらしい。僕の顔の代わりに、まん丸な月が僕と同じように覗き込んでいた。

「……母さん」
脈絡のない単語が口から漏れ出る。それを拾うかのように、絨毯はそっと捲れて僕の腕を撫でる。
「……ありがと」
僕は絨毯に背を預ける。本物の月がまた僕のことを見る。
月は誰のことも必要としていない。多分、僕はずっと無駄なことをしている。特に、ここ数十年は。
……死んでみたいね、なんて言おうものなら、絨毯も、魚も、小鳥も、みんながまた僕を守ろうとするだろう。ここでは、僕は独り言を溢すこともままならない。
遠くで目覚めた僕の欠片は、どうなんだろう。そんな無駄なことを考えながら、僕は目を閉じた。